

パネルセッション報告

専門日本語教育の現状と将来の方向

村岡貴子・因 京子・仁科喜久子・深尾百合子・加納千恵子

(大阪大学・九州大学・東京工業大学・東京農工大学・筑波大学)

村岡：565-0871 大阪府吹田市山田丘2-7大阪大学留学生センター

E-mail: tmuraoka@isc.osaka-u.ac.jp

筆者らは、2001年10月7日に立命館アジア太平洋大学(大分県別府市)で開催された2001年度日本語教育学会秋季大会において、「専門日本語教育の現状と将来の方向」と題して2時間のパネルディスカッションを行った。司会は加納が務めた。深尾、村岡、仁科、因はそれぞれ「専門日本語教育」に関する種々の観点からパネル報告を行った。その後フロアとの質疑応答を行い、最後に「専門日本語教育」研究の展望を述べ、パネルディスカッションを締め括った。以下その報告を行う。

1. 「専門日本語教育」研究の現状

東京農工大学留学生センター 深尾百合子

◇スライド1-1

これまでの「専門日本語教育」研究
『日本語教育』51号 1983.10
〔特集〕
専門別の日本語教育
—科学・技術系学生にどう対応するか

「専門日本語教育」が日本語教育の1つの分野として意識されるようになってきたのはここ10~15年である。1983年に日本語教育学会誌『日本語教育』で「専門別の日本語教育—科学・技術系学生にどう対応するか」という特集が組まれている。これは日本の科学技術を学ぶ留学生の増大に伴って需要が高まってきたJSP (Japanese for Specific Purposes)、特に理工系の留学生に対する日本語教育が問題となってきたからである。

◇スライド1-2

「専門日本語教育」研究の分類
(1) 語彙・表現の調査・分類
文章・談話の構造分析
(2) 教育方法・教材の開発
(3) カリキュラム

1990年代に行われた「専門日本語教育」研究は左記のように3つに分類される。(1)には専門分野で使用されるカタカナ語、漢字の分析、頻度調査など、また、講義の談話、専門の文章の構造、セミナーでの対話などの分析がある。(2)には語彙指導法、読解能力養成法、作文指導の試み、コンピュータ読解支援システムの開発などがある。(3)はすべて科学技術分野の集中教育プログラムの報告である。

2. 「専門日本語」の定義をめぐって

大阪大学留学生センター 村岡 貴子

◇スライド2-1

アカデミックな活動のための日本語例

- ・ 特定の分野に特化して用いられる日本語
- ・ どの分野にも共通して用いられる日本語
- ・ アカデミックジャパニーズ
「日本留学試験」に出題される日本語??

専門日本語の定義は研究者によって異なる。

筆者らは専門日本語を特定の目的のための日本語ととらえ、本稿では特にアカデミックな活動のための日本語 (JAP: Japanese for Academic Purposes) を取り上げる。

左記のように JAP には種々の解釈が存在する。従来から、理工系日本語、経済学系日本語等、特定の分野で用いられる日本語については研究が行なわれている一方で、分野を超えてある程度共通して用いられる日本語についてはあまり研究されていない。また、2002年からの日本留学試験に出題されるアカデミックジャパニーズについても、今後詳細な調査・研究が必要である。

◇スライド2-2

「専門日本語」が示す範囲

参考: 「専門言語」(宮島 1981)

- ・ 専門分野に特有の単語 (専門語)
- ・ 専門分野における文法的特徴や
位相・文体的特徴

専門分野での言語活動には、その分野で頻繁に用いられるパターン化された日本語が、単語レベルだけでなく文型や文体のレベルでも存在する。それらも専門日本語の範疇に入れる必要がある。宮島 (1981) *は、「専門言語」という考え方を紹介し、左記のように、専門分野における位相や文体的特徴までも含めている。この考え方は、専門日本語を研究する上で非常に示唆的である。

*『専門語の諸問題』国立国語研究所報告 68 秀英出版

◇スライド2-3

注目したい専門日本語の例:

- ・ 表現態度が現れる文末表現
- ・ 論理展開を示す接続表現
- ・ 談話や文章の目的と構成に適した
種々の表現形式 等々

今後、研究が求められる専門日本語は、専門家のみを知る狭い意味での専門用語ではなく、左記に示したようなものが考えられる。大学における JAP を例にとれば、JAP が用いられる状況、その談話や文章の目的等に適した明快な日本語表現であると言える。

また、異なる分野間における専門日本語の使用傾向を比較することも重要である。今後、学際的な研究がますます進む中で、種々の専門分野の教員と、言語教育にかかわる日本語教育の教員との間で、情報や意見の交換、および共同研究が一層必要となるであろう。

3. 留学生に対する専門日本語教育

東京工業大学留学生センター 仁科 喜久子

◇スライド3-1

学生による一般の日本語授業と専門分野での日本語との相違点に関する意識 (1993 調査)

日本語授業	専 門
主観的	一文が長い。 慣れると読みやすい。
日常的な言い回し	専門用語・難解な語
話し言葉	接続表現が違う。

「アカデミックジャパニーズ」の一分野として「科学技術日本語」を位置付け、理工系分野の専門教育を受ける留学生にとって必要な日本語学習シラバスについて検討する。

理工系学部および大学院の留学生に対して一般の日本語クラスで学習した内容と専門分野で使用されている日本語はどう違うと思うかという意識調査(1993)の結果から、専門分野の日本語は、難解な漢字や用語があり、文も複雑であるが、慣れれば読みやすいという結果がでている。一方、現在一般に行われている初級レベル日本語教育は話し言葉が中心であるため、集中コースを終えて研究室に入る学生にとっては、新たに専門分野における独特の表現を習得しなければならない。

◇スライド3-2

科学技術日本語シラバスの例
『やさしい科学技術日本語読解入門』初中級用
→ 理工系高頻度語彙・文型調査に基づく
テキスト構成

1. 話題性のある読み物
2. 文法語彙説明 復習+新規事項
3. ディスコース練習問題

東京工業大学留学生センターでは初級コースを終えたばかりのこのような学習者に対するシラバスを開発し『やさしい科学技術日本語読解入門』テキストを作成した。本書は、読み物はできるだけやさしい文型を用いながら、内容的には知的な好奇心を刺激し、かつ汎用性がある話題を選んだ。理工系大学テキストに現れる高頻度語彙・文型の調査に基づいたデータによる新しい学習項目を提示し、さらに定義・分類・比較などのディスコース理解とその練習問題も含めた。現在WEB上(<http://hinoki.ryu.titech.ac.jp/>)で本テキストの一部を公開して、自学自習ができるようになっている。

◇スライド3-3

今後の課題と提案

- ・シラバスの客観的評価
- ・作文・聴解・口頭表現への展開
- ・専門教育教師の協力をどう得るか
- ・教材リソースのデータベース化と共有化
- ・情報交換

今後の課題としては、学習シラバスのレベル上の拡張、聴解・表現技能への展開が考えられる。

学習者にとっての知的興味を持続させるためには、専門教育教員の支援を得ることも不可欠であり、われわれ日本語教育者はどのような形態で専門教員と連携できるかを考えなければならない。また各研究者、教師が開発した教材リソースの共有化することで、貴重な労力を有効に使う方法を見出すべきである。

4. 専門日本語教育教材の開発

九州大学留学生センター 因 京子

◇スライド4-1

種々の専門日本語教材

表現

- ↑ 表現・語彙のリソース
論文作成の手引き（構成・表現など）
専門に関する読解教材
- ↓ ゼミ・講義の教科書型
内容

専門日本語の習得を促すことを目的とする種々の教材が近年次々に提案されている。主なタイプを左記に示した。

大別すると、専門用語・定型表現・談話構成など言語の知識を集約的に提示し、理解／発信活動の直接的補助となる「表現提示型」のものと、特定の分野の内容を提示する「内容提示型」に分けられる。後者は、学習スキルの涵養を目的として、実際の学習活動を部分的／全体的に経験するためのタスクを提供する。

◇スライド4-2

専門科目型日本語教材

- 内容：予習サポート
（模擬）ゼミ／講義の資料
学習スキルの意識化サポート
- 教材例：（九州大学留学生センター）
『日本農業入門』『生物学への招待』

「専門科目型教材」とは、知識や学習スキルなどが未だ不十分な学習者に専門教育活動の全体像を体験させ、参加技能を涵養することを目的とする。専門分野の素材を中心に、表現の予習サポートとゼミ後の学習スキルの意識化サポートを日本語教官が、専門内容に関する予習、講義・演習、専門に関する課題提供を専門教官が担当する。九州大学では、農学部教官との連携により『日本農業入門』『生物学への招待』の二つを開発した。

◇スライド4-3

今後の課題

- ・専門日本語の同定
- ・素材選択の指針を得る
- ・専門担当教官との協力体制を開拓する

最期に、教材開発を行なう上での課題を左記に示した。第一は、専門日本語の実像の明確化、第二は、素材選択の指針の明確化である。素材は学習者の学習意欲を高める上で最も重要なものであるが、話題の新しさと提供する学習活動の洗練度、話題の専門性と使用対象者の範囲との間でどのように均衡を得るか、考察を深めなければならない。また、専門教官との実際の有効性の高い協力体制を開発していく必要がある。

5. 「専門日本語教育」の展望と課題

東京農工大学留学生センター 深尾百合子
筑波大学留学生センター 加納千恵子

◇スライド5-1

今後の課題
 専門日本語は、

- ・ いつ
- ・ だれが
- ・ 何を
- ・ どのように教えるのか

今後、教育の現場において、専門日本語教育のあり方を、日本語教員間、そして専門分野の教員との間で共通の議論の材料としていくためには、まず前述のような**専門日本語**の定義やその指し示す範囲を明確にすることが不可欠である。その上で、左記のように、「いつ」（留学生教育のどの時期にどのレベルで）、「だれが」（日本語教員と専門教員がどのように分担して）、「何を」（具体的にどの範囲の教授内容・教材を）、「どのように」（カリキュラム・教授法など）教えるのが効率的かを、議論し、教材開発やチームティーチングなどの共同研究・作業を通じて少しずつ明確化していかねばなるまい。

◇スライド5-2

今後期待される研究

- ・ 基礎学術用語・表現の調査分類
- ・ 文章・談話の構造分析
- ・ 専門分野における言語使用能力の分析
- ・ 教材・教育方法の開発と評価

これまで行われてきた語彙・表現の調査・分類の中には専門性の高いものを対象としたものも見られたが、それはむしろ専門分野の教員に任せるべきであり、日本語教育としては、基礎学術用語・表現のデータの蓄積によって、留学生に有用な用法辞典（例えば、共起しやすい語彙、格助詞を伴った動詞など）の開発を考えるべきではないか。分野ごとに作成されている専門用語辞典に取り上げられない基礎学術用語（語彙・表現）の調査・分類が求められる。また、文章・談話の分析によって専門の場面での日本語運用能力を高めるための多種多様な教材・教育方法の開発が進むことが期待される。同時に、日常生活で使用される日本語と研究発表など専門分野のフォーマルな場面で求められる日本語との違いなどを明確にする必要がある。これまで、教材・教育方法の開発は活発に行われてきたが、それらの評価は十分とは言えない。今後、教材・教育方法の質を高めていくためには、客観的な評価が広く深く行われる必要がある。

◇スライド5-3

研究活動に求められる日本語
 ↓
目標となる日本語モデルの追究

また、留学生を対象とした専門日本語教育の目標は、母語話者である日本人のレベルである。しかし現在、到達目標であるはずの日本人（特に理工系）の日本語使用能力が問題視されてきている。専門分野でのスムーズな情報収集及び情報発信を可能にする明確な日本語のモデル作成、運用能力の養成のために、専門分野の研究者、技術者などとの共同研究がさらに活発に行われることを期待する。